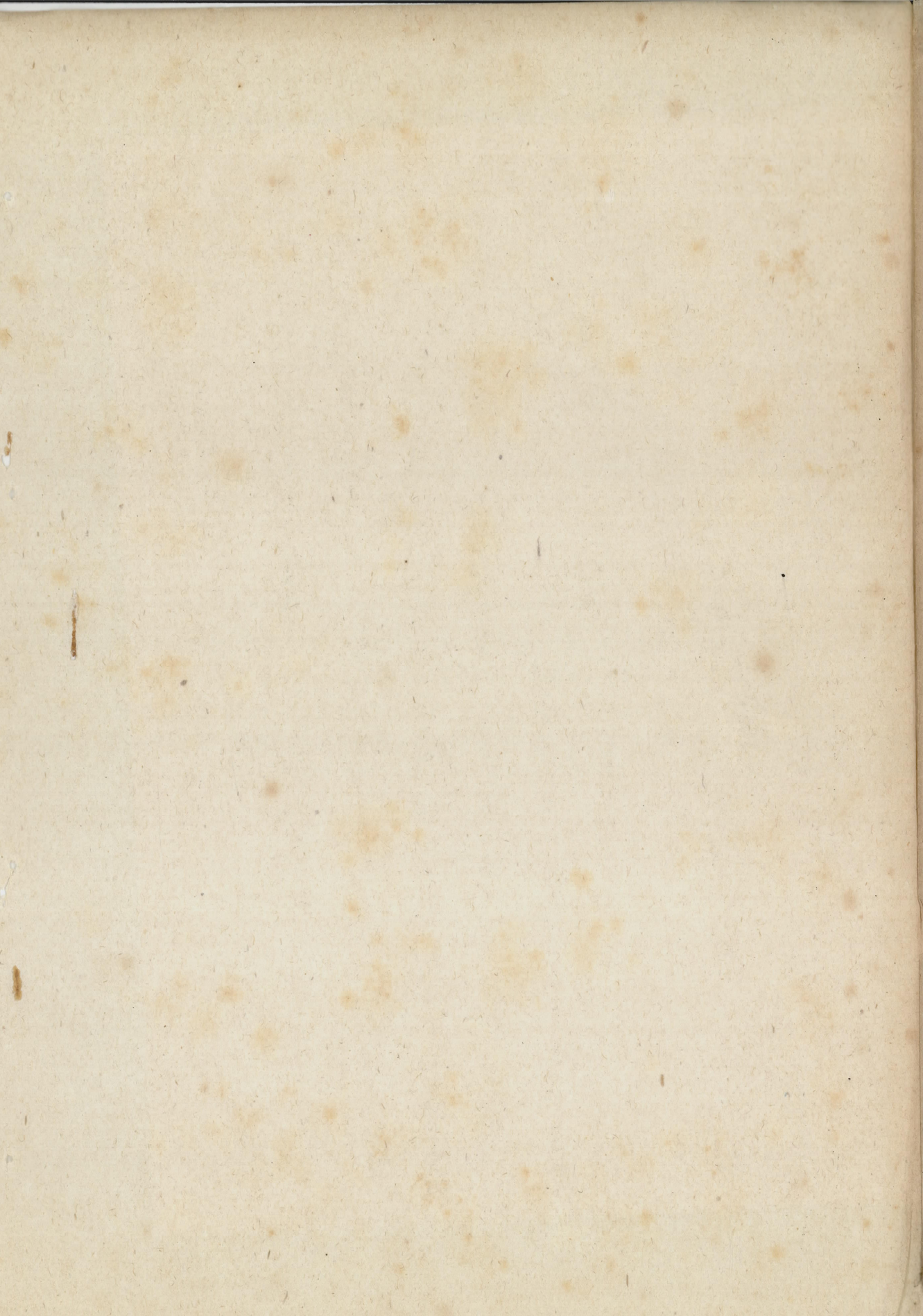


大東亞建設民族人口資料 一一
昭和十七年三月十日

支那民族史略說（暫定稿）

厚生省 人口問題研究所

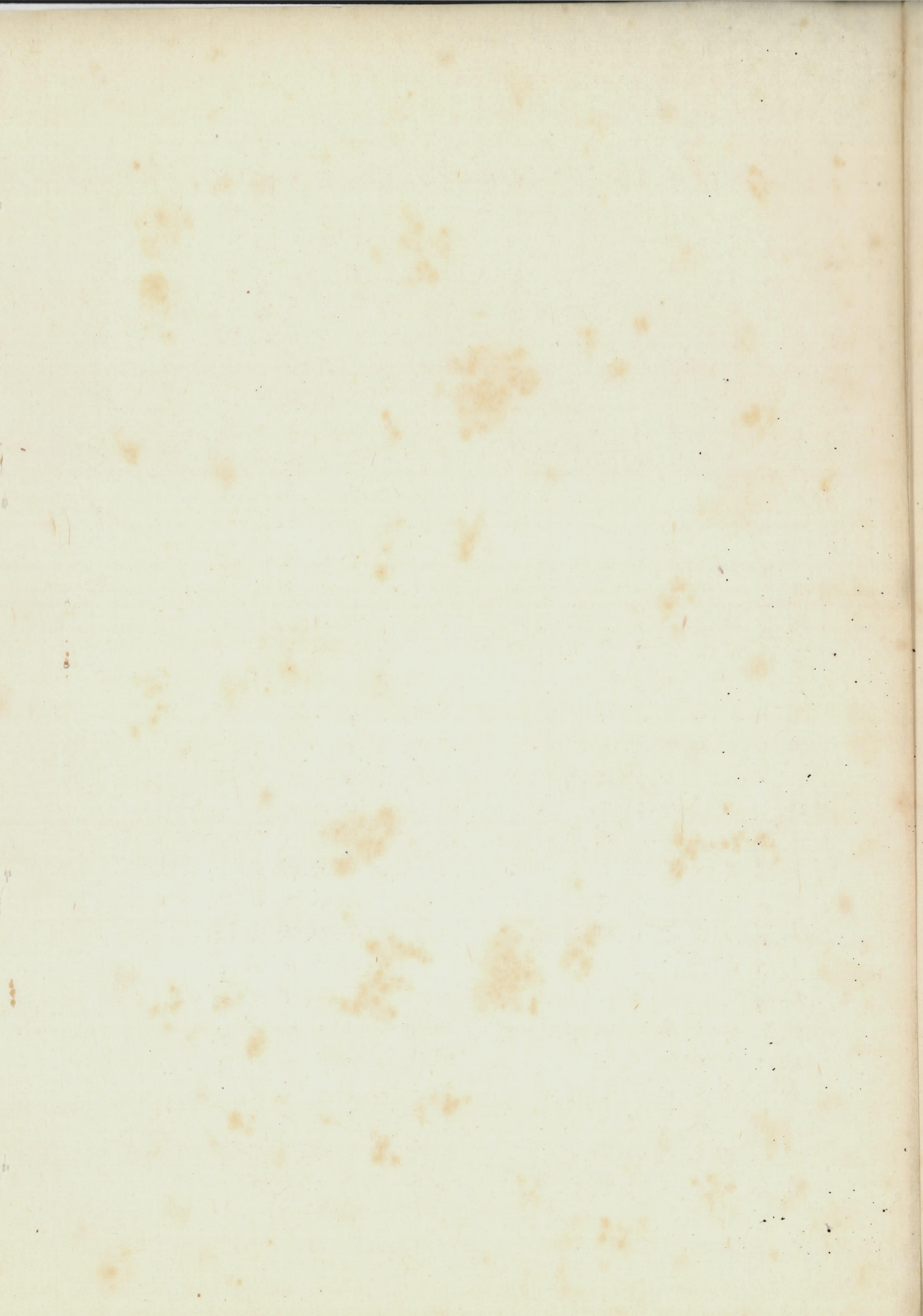


はしかみ

大東亞共榮圈建設上最も留意すべきは支那民族の動向なりとす。従つて其の民族的本質及東亞に於ける社會的勢力を検討するは喫緊の要務なりと云ふべし。本硯究所に於いては此の点に鑑み、尤づ其の史的変遷の跡を逐好んとして、茲に關小硯究會として、其の沿革を略説せしめたり。據る所は別掲文献を主とし、問題の性質上詳微甚だ至らざるものあり、著定の草稿を假に騰寫に附せらるに止まるべし。

昭和十七年三月十日

厚生省 人口問題硯究所



支那民族史略説

第一序説

現在中華民國を構成せる主幹民族は、云ふ迄もなく所謂「支那民族」即ち上世の「華夏族」、中世の「漢族」なりとす。元末支那民族は單一純粹なる民族にあらずして、多数の族系に属するものが、一の主幹民族を中心として、長年月の間に漸次混融同化したるものにして、この主幹民族が永くその名稱と文化とを保存し、之と接触混融せる諸族系は次々にその名稱と文化とを失ひ去りしものなり。即ち所謂固有「華夏族」は有史以前より搏息したる土着民族と認められ、新石器時代後期には黃河流域に居住したりしが、甬後五六千年の間、近隣の異系民族と不斷に接触して、之を同化吸収し、生活地域も亦漸次拡大し未たりしなり。

華夏族(秦代以前の稱)に早く吸収同化せられし民族に、所謂「東夷」、南蛮「西戎」、北狄」あり、漢民族(漢代以後の稱)に吸収同化せられしものに、「匈奴」、「氐羌」、「東胡」、「南蛮」、「西南夷」等あり、隋・唐より五代、宋・元の世代に於ても「突厥」、「契丹」、「女真」、「蒙古」等の諸民族と混融し、明末より清の時代に於ても「蒙古」、「蒙兀」、「蒙兀」等の諸民族と混融し、去りたり。更に此の滿洲族が関内に入るや、民國に至る迄之亦完全に同化し去りたり。更に此の間回部、羌、藏、蒙古、苗、瑶等の血統も多少なりとも混入し未だれるは言を俟たず。由是觀之、ひとしく華夏族と云ひ、漢民族と云ひ、支那民族と云ふも、其の實質より見るときは、時代により大いに異なるものにして、即ち秦代の「華夏族」は既に三代の「華夏族」にあらず、隋唐の「華夏族」は又自ら秦の「華夏族」と異なるものとす。明清代の漢族、現代民國の支那民族が、又昔日の「華夏族」或は「漢族」其物にあらざることは云ふ迄もなし。

然れども此の間混融同化の中核となりし主幹民族は往時の華夏系、即ち漢民族にして、雑多の異民族を吸収没入せしめつゝ、永くその文化と歴史とを保有し来たりにしものとす。

(1) 東夷系 今その同化混融の事情を略説すべし。秦以前には中國の東部即ち、現在の山東、江蘇、安徽一帶に居住し、其の支派に、鬲夷、淮夷、徐戎、島夷、來夷、介夷、根牟夷等あり。三代より春秋に至る迄に、華夏系と頻繁に接觸せしため、早くより同化せり。古書に云ふ舜は東夷の人と稱せられ、管仲も亦夷人と傳へらる。更に現在の學説に依れば、殷、商も夷系に屬するものゝ如し、秦の天下統一以後は各地に今散して、完全に華夏と同化し終へたり。

(4) 荊吳系

荊は殷代の記録に依れば之を荆楚と云ひ、長江の中域に居住せり。春秋時代には尚自ら「蠻夷」に居て、諸夏も亦之を「荆蠻」と呼ぶ。華系以外の一別派を以て目せり。然れども此等は北方に向ひ、夏の諸小國を討滅併合し、中原に覇を争ひ、所謂戰國時代を現出し、其の間完全に華夏に同化した。吳人も亦「荆蠻」に屬し、春秋の末始めて中國に通じ、其の開化は華夏の影響を受くること多く、越を亡ぼし、後ち楚に入り、之亦全く華夏に同化した。

(5) 百越系

越即ち粵は其の種類多く、春秋時代に「於越」、「閩越」、「南越」、「駱越」、三國時代に「山越」あり、秦漢時代に「瓯越」、「閩越」、「南越」、「駱越」、三國時代に「山越」あり。其の居住地域は現中國の東南及南方各省に亘れり。越族が何種族に屬するや不明なるも、其の大部分は華夏に同化した。

(6) 東胡系(滿族)

東胡は支那の東北部に住み、秦以前には「山戎」、「北戎」と

(木) 肅慎系(濛濛)

緝し、華夏族は之を「東胡」と呼べり。漢の初期「匈奴」に亡ぼされ、分れて烏桓及鮮卑の二派となりしが、匈奴の衰亡後再び勃興したり。烏桓は三國時代に曹操の爲に滅され、頓て同化せしむ。鮮卑は匈奴の旧地に移住し、尋いで五胡が支那を亂せし時代に東部に入り、前燕、後燕、西燕、南燕、西秦、南涼を建て、後ち北朝の後魏及北周となり、又一部は西に徙り西域に吐谷渾國を建設したり。支那に移住せし烏桓、鮮卑は皆華夏に同化せしが、北方には尚ほ「柔然」あり、後には突厥の爲に滅ぼされたり。唐以後奚及契丹相繼いで興り、奚は契丹に併合せられ、契丹は後に遼國を建てしが、支那に居住せしものも亦漢族に同化したり。

(ハ) 匈奴系(回族?)

其の居住地は華夏に比較的遠かりしも、文献には早くより現はれ、魏晉の時代之を「挹婁」と云ひ、南北朝には「靺鞨」となり、唐代には渤海國を建設したり。宋代には「女眞」と稱し、金國を建て支那の一半を占據せしが、國亡びてより後漢族に同化したり。明末には滿洲と號し、清朝を建て二百数十年の長きに亘り統治せしも、滅亡後は殆んど全族が皆漢族に同化したり。今日に於ては僅かに滿洲に在る土著民が依然として比較的純粹なる血統と風俗とを保存するに止まれり。

戎、北狄と呼べれ、戰國以後は「匈奴」と稱し、漢代の初期には甚だ強大なりしも、後ち漢族に征服せられたり。一部は支那に入り混み五胡の亂に降しては「前趙」、「後趙」、「夏」、「北涼」等の諸國を建てたるも、後ち何れも均しく漢族に同化したり。但し匈奴の一部は遠く西方に走り、又二派に分れ、西域に入りしものは「悦般國」

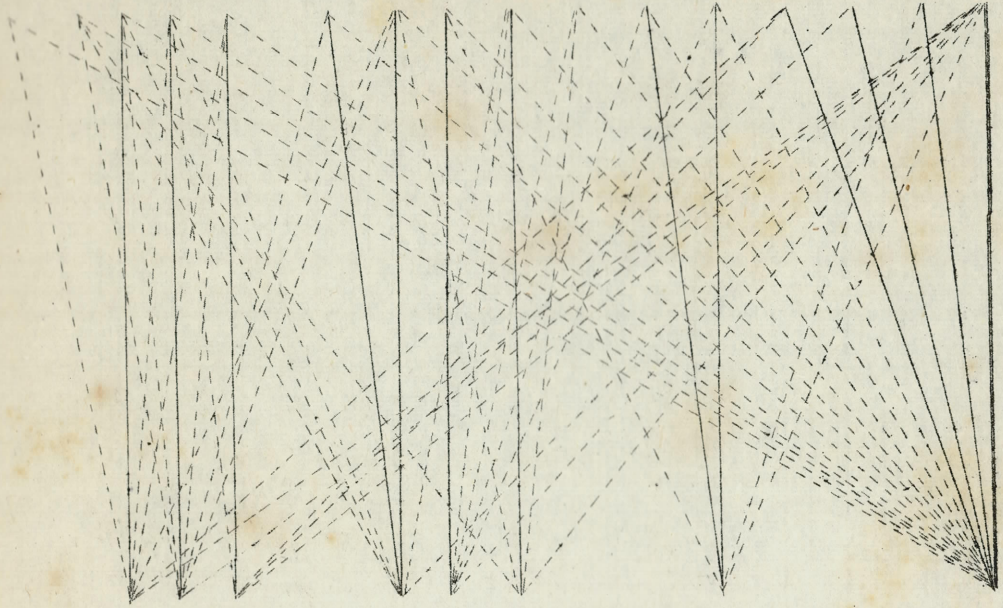
突厥系(回族)

を建設し、政洲に入りしものは「匈牙利」となりしものなり。
漢時代の「丁令」之にして、元末「匈奴」以北に居住せしか
匈奴の西遷後鮮卑が此地に入り、頓て鮮卑が支那に入るに及び、
其の後を襲ひて南下して、此處に據りしものなり。漢北に在りし
ものを「鐵勒」と名づけ、漢南に在りしものを「高車」と名づけ、
鐵勒の同族「突厥」は南北朝時代「鐵勒」の諸地方に勢力を張りしが、
後唐に滅ぼされたり。鐵勒の一部「回紇」は之に次いで興り、後新
疆に移り、突厥の別派「沙陀」は支那に入り、五代の後、唐、後新
後漢の三朝を建てたり。回紇は元代には「畏吾兒」と名づけ、明朝
以来略して回族或は回部と呼べり。

以上の外支那本部に入りて同化し、又は多少なりとも影響を與へ、或は受
けたる辺境の民族には、蒙古系、西羌系(藏族)、藏系、苗蛮系、羅羅緬甸系、
僂僂系(泰揮)あり、更に一部には白色人種、黒色人種等の混入もあれども、
勿論此等は支那民族の根幹に重大なる影響を與へたるものにはあらざるなり。
今一覽の便宜上各民族の系統を圖示す此は左の如し。

(歴史上の民族)

- (1) 華夏系
- (2) 東夷系
- (3) 荆吳系
- (4) 百越系
- (5) 東胡系
- (6) 肅慎系
- (7) 匈奴系
- (8) 突厥系
- (9) 蒙古系
- (10) 氐羌系
- (11) 藏系
- (12) 苗瑤系
- (13) 羅緬系
- (14) 白夷系
- (15) 黑種



(現代の民族)

- (1) 漢族
- (2) 滿洲族
- (3) 回族
- (4) 蒙古族
- (5) 藏族
- (6) 苗族
- (7) 瑤族
- (8) 羅緬族

第二 支那民族の發生

生物學上及人種學上の支那民族は姑く之を措き、又傳説上の興廢も之を問
 はず、文獻上には現はれたる支那民族の興亡盛衰の跡を次に一瞥すべし。
 乃至三千五百年前に在りと云ふべし。其の活躍の場所は黄河腹部の河谷にし
 て、住民は略々現在支那に於て見る如きものにして、其の文化は周圍の異種
 族に比して遙かに優れ、既に狩獵時代を經過して農業時代に進み、其の社會
 組織は所謂氏族制度にして、父権を基礎とし、数多の同系の氏族即ち血族團
 体に分岐したり。此等氏族中の有力者たる殷部族が漸次諸他の部族を従へて
 茲に殷王朝を開きしものなり。西方に於て周族が漸次抬頭し來たり、
 殷が黄河中原に勢力を張れる間に、戎狄の俗、穴居の風を退け、城
 廓宮屋を營み築き、邑を分ちて之に居り、古公亶父の孫昌の時には西方諸族
 の長即ち西伯となり、強大なる勢力を占め、遂に殷に代るに至り、即ち陝西省
 盛時に於ける周の領域は、黄河の下部中流及支流渭水の南北、即ち陝西省
 南中道より、山西省・河北省の南部、河南省及山東省の北部に亘りしものと
 認められ、周朝は此の支配區域を中國と稱し、其の地の住民を華夏族と唱へ
 たり。

周は周知の如く華夷の別を立てたれども、其の區別は單に文化の高低に依
 りしものにして、異民族と雖も文化高きとせば必ずしも夷を以て遇せざりき。
 然のみならず所謂同姓不婚の原則を採用せしことは、却て寧ろ異民族との雜
 婚を奨励せらるゝの結果を未だし、民族の同化混融は益々促進せられたり。

周の国力衰ふるに及び、東西の蛮夷は漸次中國に未侵し、宣王の代、一時
 北は玁狁、西戎、東は淮夷、徐夷、南は荆蛮を伐ちて復興を示せしも永續せ
 ず、次王幽王は犬戎に殺され、平王は遂に東遷するに已むなきに至り、斯
 の戎を斥け、之を亡ぼして周を救ふは當時全く春秋諸侯の雙肩にありしか
 魯莊公は秦を伐ちて却冀の戎を取り、後ち晉は驪戎を滅したり、然れども周
 の勢力は益々衰へ、之に對して諸侯の争覇は愈々激甚を加へたるに際し、諸
 侯中異族を其の權内に收め、之を兵士に利用して武威を張らんとせじものあ
 り、此の爲に蛮夷の漢族同化は一段と促進せしめられたり。
 斯くて蛮族は始め周を助け、周王朝を樹立せしめられたれども、頓て周の衰弱
 に乘じて勢を得んとし、却て諸侯の勢力を増大ならしめ、蛮族自身は結局周
 の政權を奪ふことを得ずして却て諸侯に征服せられ、諸侯の兵士の一部とな
 り、遂には不知不識の間に漢民族の血夜の中に没入せしめらるゝに至れり。

第三 秦の天下統一と支那民族の成立

秦は遂に武力を以て天下を統一せしか(西紀二二一年)、その領土は曾て殷
 周を統治せし領土に比し甚だ拡大せられて、今日支那本部の内唯西南の一
 角を除くに止まれり。而して此の領域内に包轄せらるゝ住民は、華夏族の外、
 南方に於ては古の荆蛮及武陵蛮、東南方に於ては吳、越、西方に於ては義渠
 西南方に於ては巴、蜀の諸族等を始め、春秋戰國の諸侯間に參錯せる異族も
 亦少からざりき。而して此等諸族も亦殆んど總べて華夏系に同化し去られた

るものなり。今考のため春秋戦國の諸侯間に參錯せる異族を地理的に示せ

ば概ね左の如し。

- 陝西省 白狄(狄)、隗、驪戎、犬戎
- 河南省 戎蛮、泉鼻戎、陸渾戎、洛戎、茅戎、徐戎
- 山西省 唐谷如(赤狄)、蒲(赤狄)、皐落氏、北狄、肥、白狄(狄)
- 東隸省 鮮虞(中山)、無終(山戎)、潞氏(赤狄)、山戎、鼓
- 山東省 長狄、戎
- 江蘇省 淮夷
- 湖北省 盧戎
- 湖南省 濮(百濮)

秦は北万里の長城より南南越に及び、西四川より東東海に至る廣大なる地域と人口とを擁し、域内外の異民族を包擁同化し去り、「秦」の國名は即ち「支那」と訛傳せられて、永く固有名詞となり、引いては「支那民族」の名稱を自ら創り出さしむるに至れり。而して斯くの如く支那民族の統一が、純血華夏族の力に依るにあらざして、蛮族の出と稱せらるゝ周及秦の力に依りて成りしことは、注目に値すと云ふべし。

第四 漢代及南北朝(漢族)

頓て秦朝亡び、匈奴が再び勢を得、東に東胡を討ち、西に大月氏及烏孫を亡ぼし、南下して又河套の地を略し、中國を攻めて漢の高帝を平城に圍むに逐れり。漢は永く隱忍を重ねしが武帝に至り奮起して、武力を以て匈奴を駆逐し、又烏孫と聯絡して西域諸國と戦つて之を降したり。東漢の末より晉の

初に至る迄、匈奴、鮮卑、氐、羌は降服して國內に入り、漸次漢化せしが、
室を自ら内訌を生ずるに及び、五胡（匈奴、羯、鮮卑、氐、羌）が機に乗じて各
獨立を謀り、中國北邊に割據するに至れり。晋室はこゝを爲に南方に遷り、漢
民の一部は江南に奔つて逃避し、一部は北方に留まつて五胡の武力統治下に
服し、之と混融したり。北方の五胡は前後十三國を建て、漢の建立せし三國
と合して十六國と唱へられたり。五胡の興亡は次の四期に分つことを得べし。

(一) 前趙興隆期 五胡の中匈奴と鮮卑とが最も大にして、匈奴は多く本部内
に居住し、同化の程度も高く、其の興起も早かりき。漢末より匈奴の軍

干は姓を改めて劉とし、自ら漢の外甥と稱せり。其の後裔劉淵は已に漢
化せる匈奴人にして、晋の八王の乱に降して兵を起し、今の山西省に獨

立して、國号を漢と稱し、後に趙と改めたり。其の子孫は遂に西晋を滅
ぼしたりしが、三代の劉曜に至りて後趙に滅ぼさる。

(二) 後趙隆盛期 後趙は匈奴の羯系なり。前趙を七ぼして其の地に據りしを
以て、民には匈奴、漢人其他が有りしか。七代二十五年にして前燕に亡

ぼされ、爾後匈奴は更に漢族との同化を促進せしめられ、遂に再起する
を得ざりき。

(三) 前秦興隆期 前秦は氐、羌、苻姓の者の建てし國なり。苻堅の時代に漢
人王猛を用ひて主とし、前燕、前涼、氐、鮮卑、乞伏等の部族を滅ぼさ

んと謀り、西域の諸國を平定し、晋の漢中成都を抜きて北方支那を統一
したり。後大軍を率いて東晋に南征したるが、淝水に敗れ、二代にして

後秦に七ぼされたり。

(四) 後燕、後秦併立期 前秦の滅亡後、前燕の遺族が獨立し、後燕となつて

華北の東部、今の山西、山東、河北及朝鮮の地に割據したりしが、五代

にして七ぼ。後秦は羌族の立てしものにして、華北の西部、甘肅、陝西

に七ぼ。後秦は羌族の立てしものにして、華北の西部、甘肅、陝西

に七ぼ。後秦は羌族の立てしものにして、華北の西部、甘肅、陝西

に七ぼ。後秦は羌族の立てしものにして、華北の西部、甘肅、陝西

に七ぼ。後秦は羌族の立てしものにして、華北の西部、甘肅、陝西

河南の地に據りしも、後に東晋に亡ぼさる。五胡十六國の亂は百数十年にして漸く鮮卑拓跋氏の魏に統一せられたるが、一方東晋も亦宋に亡ぼされ、茲に南北朝の對立を見たり。即ち南は漢族の支配にして、北は諸族が雜居混合したるが、而も此等も終には漢族に同化し去りたり、即ち魏は北方の統一を完了して、傾て洛陽に遷都して元氏と改姓し、鮮卑人をして漢人と結婚して漢姓に改めしめたる結果、漸次鮮卑の漢化が行はれ、魏に代りし北齊、北周も亦鮮卑の流を吸みしものなるが、之亦三代の旧制を尚ぶ、大いに漢化に努力したり。

第五 隋乃至元

南北朝時代に支那本エに入りし諸民族は、漸次漢族に同化混入したるが、関外にある新興民族、即ち突厥、回紇、吐蕃、南詔、契丹、黨項、女真、蒙古等は、隋より唐、五代、宋、遼、金を經て元に至る間、絶へず関内の漢族と接觸交渉し、其の結果は漢族第三次の擴大を齎らすに至り、殊に唐より國力の發展著しく、國外に於ても所謂唐人の稱を生れて、漢民族の別名となりし程なり。

隋の楊氏は漢の楊震の後裔と稱せらるるも、恐らく純粹の漢人にあらざるべく、唐の李氏も亦西涼の李嵩より出でし純粹の漢人となされ居るも、現代の史家は寧ろ異族の出身にあらざるかとの疑問を抱けり。李氏が右の如き疑問あるのみならず、その臣も亦多く異族の出身にして、用ひし兵は更に異種族なるもの多かりき。然れども名義上は華夏を以て自ら任じ、漢風を採り

又漢族の要素か他族に比して多かりしため、民族の主幹は尚ほ漢族に在りしは云ふを俟たず。

唐の盛時には、北西の突厥、鐵勒、回紇、高昌、龜茲、黨項、吐谷渾等皆征服せられ、吐蕃、焉耆、疏勒、干闥、天竺、罽賓、康國、源斯等皆来つて

朝貢し、東方の高麗、百濟、新羅等も入貢するに至り。又西南に於ても、貴州の東謝蛮、牂牁蛮、四川の南平は何れも臣服朝貢し、印度支那の林邑（安南）、暹國（緬甸）、真臘（東蒲窣）、南洋の婆利（婆羅洲）、盤盤、陀洹（林邑）

西南の大海中にあり、訶陵、墮和羅、墮婆登等も来貢せり。唐の安史の乱は歸化異族の謀反なりしが、以後唐の國力衰へ、異族の大部分は服従を絶つに至り。此の時代回紇は蒙古に占據し、匈奴、突厥の故地に據り、勢獨獺を極めたり。吐蕃は現在の西藏に在つて、唐の衰弱に乗じて支那西部河西、隴右の地を占據し、一時長安を陥入れしことあり。又突厥の別系沙陀族も新疆より支那に入り、一時後唐、後晋、後漢の諸朝を建て、勢威を振ひしことありとす。

宋の太祖は頓て支那を統一したりしが、國風として文を重んじ、武を輕んじ、漢族文弱の風を養成せしを以て、異族に對する支配力甚だ弱く、東北の遼、契丹、夏（氏羌系）、金（女真）、元（蒙古）の諸族は漸く之を侮り、遂に宋は滅亡するに至り。

蒙古は南宋の末期に興り、本部を統一して後ち西夏及金を滅し、進んで宋を併し、遂に異民族を以て全支を統一するの未曾有の例を作れり。世祖の代より國号を元と改めたるが、兵力の強大なること前古に例を見ず、西域の回紇、花刺子模、欽察等の國より、歐洲を蹂躪し、又東方にては高麗を征服し、南方にては大理、吐蕃を攻略するに至り。其の支那統治は八十九年にして終り、漢族の明兵のため塞外に追はれたるが、その支那に在る間も餘り漢族

に同化せず、國外に遁れたるものは現在の蒙古人として、固有の文化・風俗を保持せるは周知の如し。然れども支那本土にあること長きに及べば、不知不識の間に血統の混合、文化の交流あり、元滅亡後本部に止まりし蒙古人及色目人（西域人）は皆漢族に同化したり。

第六 明より現代に至る

明はその初期兵力甚だ盛んにして、四方の異族を克く征服せり。即ち蒙古は北に遁れ、後分れて韃靼、瓦利の二部となり、明の成祖は屢々親征して之を大破し、又南方安南は五代の末独立したりしが、成祖は又之をも征服し、其他西南の土族へ苗、獠、僂、羅、緬甸に對しても、土地を開発して之を懐柔したり。又南洋諸島に對しても屢々人を派遣し、大部隊を率ゐて遠征し、遠く印度洋、アラビヤをも未貢せしむるに至れり。此のことは一面國人の海外発展の氣運を促進し、爾後植民移民も盛んに行はるゝこととなれり。明の中葉以後國力衰へ、屢々異族に反かれて征することを得ず、遂に肅慎系、滿洲族に亡ぼさるゝに至れり。初め蒙古の「瓦利」が復興して北境を侵略し、明の英宗は之を親征して却て虜にされしことありしが、「瓦利」の勢衰ふるに及び、韃靼ついで起り、又頻りに辺境を侵掠したり。然るに頓て東北の「女真」族が復興して滿洲と号し、兵を起して明の辺境を攻掠し、在滿の明の諸城を陥れて関内に迫り、終に明を滅すに至れり。滿洲は建國して清と号し、関内に入りてよりは漢の降將等を用ひて明の王を滅ぼせしが、後又三藩及台湾の鄭氏を誅滅して、全國を統一したり。清の初期は兵威盛んにして、疆域は明に比して更に大となり、蒙古、西藏、新疆の諸族を隸屬せしめ、又雲南、広西、貴州、湖南の諸省の苗、僂、羅、緬三民族を制圧し、且つそれらの諸省を開墾して漢人を移住せしため、土族の漢化は一段と進行したり。然れども其中葉阿片戰爭以後、國威大いに傷なひ、漢族の會党叛乱屢々起れり。殊に太平軍が興つて種族革命の旗を掲ぐるに至るや、清朝は一旦之を討伐することを得たりと雖も、其の軍は漢人にして滿洲の兵に及らざるより漸く漢人の抬頭を見るに至れり。而して清末

屢々外國に敗れ、威信を内外に失墜するや、漢人遂に兵を起して第二次の種族革命を行なひ、遂に清室の退位を見たるは周知の如し。清朝の初め関内に入るや、頗る意識的に漢人をして滿洲化せしめんとし、辮髪、易服等皆強制的に施行したりしも、結局人口少なく、文化低く、殊に其の人民を盡く移して各地に駐防せしめ、漢人と雜居せしめしめたために、数代の後には漸次漢化し終り、関外に残りし少數の滿洲族のみが、清の滅亡後も略々原状を保存するに止まりしなり。蒙古即ち内蒙に於ては清末行はれし漢人の大量移民により、蒙人も亦次第に漢化し、新疆の回族、青海の唐古特族、西康の西蕃も亦、漢人のその地に移植せらるゝと共に、頻繁に之と接觸混融し、徐々に漢化するに至れり。斯くして支那民族は茲に第四次の拡大を見ることゝなれり。

第七 結尾

以て依て觀察するに、
 (イ) 支那民族の成素は甚だ複雑にして、黃色人種中の諸民族の大半を包攝し、之に白色人種、黒色人種も亦多少混入す。
 (ロ) 支那民族は右の如く雜多の系族の混融したるものなれども、古くより一系の主幹民族あり、他の諸系は相次いで之に混同没入せしたため、主幹系の名称及び文化が残りしものとす。
 (ハ) 支那民族の同化順序は波瀾状をなし、一起一落の狀態を呈せり。即ち始め二種以上の民族が相互に接觸する時は、戦を交へ、諸侯を見をなして一時騷擾を呈せしも、終には混合同化して平靜に歸す。旧民族の同化終るに及び、又新民族との接觸あり、略々同様の聖路を全て同化するに至る。

る。斯くの如く反復して遂に四境の異民族を概ね屢々同化没入し終りしものとす。

(二) 右の如く主幹民族、即ち華夏系は一度拡大する毎に、其の原質を改変するを以て、後代と前代とは名稱を同じくするも、實質は異なり、今日の支那民族は明代の支那民族にあり、明代の支那民族は唐代の支那民族にあり、唐代の支那民族は又漢代の支那民族にあり、漢代の支那民族にあり、雖も又太古の支那民族にあらざるなり。

(三) 支那民族の具有する成分には、既記の如く匈奴、肅慎、東胡、突厥其他があり、其濃淡は自ら差あれども、之を含まざるはなしと云ふも過言にあらず、而も特別の状態にあるものを除けば、今日と雖も辺境の異民族は尚ほ日に漢化の一途を辿り居るもの如し。

文獻

- 林惠祥 支那民族史
- 崇文炳 中國民族史
- 王相齡 中國史、中國民族史
- 登之誠 中華二千年史
- 松岡善八 支那民族性の研究

